

第 91 回 防災カフェを開催しました。

被災地での支援活動レポート

～避難所支援からの学び～

日時：2024年9月13日（金）18時30分～20時

報告者： 滋賀県職員 高木 和彦 さん

滋賀県職員 竹内 雅美 さん

滋賀県職員 大平 孟彦 さん

報告者・ファシリテーター：

滋賀県防災危機管理局防災対策室 主任主事 川田 幸寛 さん



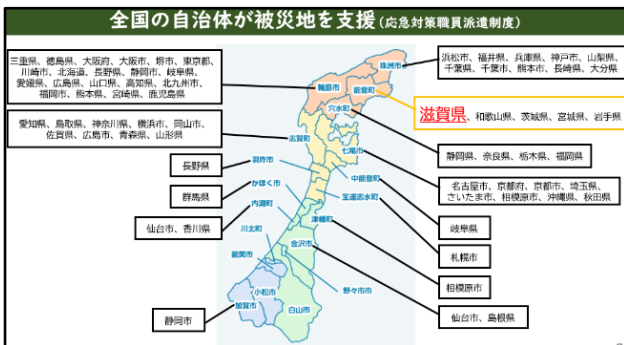
1月1日に発生した令和6年能登半島地震の支援のため、1月から5月まで滋賀県や県内市町から多くの職員が現地に赴き支援活動に取り組みました。石川県能登町での避難所支援活動を中心に被災地の様子や今後の災害への備えとして学んだことについてお話いただきました。

滋賀県からの被災地支援

川田さん：能登半島地震では滋賀県もいろいろな支援をしましたが、今回は避難所運営に絞ってお話します。滋賀県で災害が起きたら、皆さんも避難所に避難する可能性があります。避難所は逃げてこられた方々が主役です。行政が何でもしてくれるように思いますが、そうではないのです。

能登町には6回支援に行きました。1月1日に発生した令和6年能登半島地震は最大震度7で甚大な被害が出ました。古くて耐震性の低いと思われる建物が、主に倒れていたという印象です。また海沿いでは津波に襲われて甚大な被害がありました。奥能登地方は山がちな半島で周囲を海に囲まれていましたので、山が崩れてトンネルが塞がったり、道路がずたずたになってアクセスが難しくなりました。能登町や珠洲市は高齢化率が50%で、人口の半分以上が高齢の方という地域です。

ライフラインの被害も大きく、水道は5月末ぐらいまで復旧がされなかったところもあります。電気は1週間ぐらいで復旧し、携帯電話、通信関係も1月の中旬には概ね復旧しました。1月2日時点では能登町では60カ所近い避難所に5,000人ぐらいの方が避難されていました。町の人口のうち3人に1人が避難所に行かれた、行くしかなかったという状況でした。



況でした。

甚大な被害が出た地震のため、全国から多くの支援が入りました。能登町であれば、滋賀県を始

め和歌山県、茨城県、宮城県、岩手県の5県で支援するなどの役割分担をしています。輪島市などの市町村にも分担して多くの自治体が応援に入りました。日本でどこかが大規模に被災すると全国から支援するという方法を取るようになっていきます。

1月2日に滋賀県は能登町を支援することが決まり、1月3日にはリエゾン（仲介、つなぎ）チームが現地の様子を調べるために能登町に入りました。1月6日に最初の避難所運営支援職員が現地に派遣され、避難所の運営を4月30日まで約4ヶ月間支援をしました。

発災後、ある能登町の職員の方は家族の安否確認、自身の安全確保、周りの方々の救助などをしながら、急いで能登町役場に向かわれました。被災された職員の方もいらっしゃいましたが、それでも登庁して災害対応にすぐ従事されています。電話が鳴りっぱなしで、被害の状況の確認などとても忙しい状況だったと聞いています。そのような状況が二、三日続いて不眠不休で働き、睡眠というよりデスクで気づいたら意識を失っていたという状況だったそうです。

災害が起きるとやらなければいけないことがたくさん出てきます。避難所運営など被災した方々の支援だけでなく、自宅が倒壊してしまった方が生活するための仮設住宅ができないと、避難所から出られません。水道などのインフラの復旧も行政がしなければなりません。発災直後には避難所の運営のために役場の職員さんが避難所に向かわれますが、たくさんの人手がとられてしまうと、住宅やインフラの復旧に手が回らない状況になってしまいます。避難所の中でできるだけ自分たちでできることをすると、行政が住宅やインフラの復旧に手が回せるようになっていきます。

避難所支援活動 その1 宇出津（うしづ）小学校

高木さん：1月16日～22日までの第3クールで派遣されました。派遣先は役場から徒歩で5分ぐらいの街の中にある能登町立宇出津小学校です。避難所が開設されて3週間ほど経っていましたので、日課もほぼ決まっていました。この小学校は3階建ての建物で、建物の真ん中に二階建ての体育館がありました。本来なら体育館が避難所になるのですが、地震で壁にひびが入っていましたので、メインの避難場所になったのは1階のランチルームでした。それ以外に1階の会議室や2階の教室も利用されていました。初日には250人から300人ぐらいの方が避難されていたようですが、私が行った日には70、80人ぐらいの方が避難されていました。2週間以上経っていますので、Wi-Fiや充電の設備もあり、缶詰を中心に多少の食糧支援も入っていました。滋賀県からの派遣職員が3名、町役場から交代で1名、保育園の保育士さん2名、小学校の調理師さん5名ほど、避難されている方にも加わっていただき、10名ぐらいで避難所を運営していました。

能登の1月は寒いのですが、幸いランチルームはエアコンの暖房を使うことができました。会議室や教室もエアコンが使えたので寒さはしのげましたが、共有スペースの受付や玄関ホールは大きなヒーターで温めていました。

避難所で中心になる食事は、レトルトのおかゆ、アルファ化米、カップラーメンという状況でしたので、高齢の方には厳しかったようです。朝はカセットコンロを熱源にして、おかゆやご飯を温めましたが、お湯を大量に沸かさないといけません。朝食に間に合うようにするには6時前からお

湯を沸かさないといけないという状態でした。

ただ私が支援に入った頃から少しずつ炊き出しもいただけるようになりました。野菜いっぱい味噌汁はとても美味しかったです。避難者の方は野菜がどうしても不足しますので、温かくて野菜がたくさん入っていましたので、皆さんすごく喜んでおられました。災害が発生して2週間、3週間弱で、ようやく炊き出しが届き始めたという感じでした。



宇出津小学校では、下水がやや心配でしたが、水洗トイレを使っていました。上水道が使えませんでした。幸いプールに水が残っていたので、水やりを使うホースをサイホンのようにしてプールの水を桶に溜めて、ポリバケツに移し、台車で運んでトイレで使用しました。一回のトイレで小さなバケツほぼ一杯の水がいります。70、80人の方が使われるので、何度も往復しないとイケませんでした。屋外トイレとなるとトイレに行きたくないから水分を摂らないという悪循環に陥ることもありますので、屋内トイレが使えたのは良かったと思います。

飲料水は給水車やペットボトルの供給が安定してきて必要最低限は確保されていました。上下水道が復旧していないで、洗濯がなかなかできませんでした。健康状態も保健師、医師、看護師の皆さんによる巡回がほぼ毎日行われていましたが、診察や治療をしてくれるわけではありませんでしたので、具合が悪い方を病院に連れて行くと、半日は帰ってこれないという状況でした。

災害発生から2週間ほどが経ちましたが、洗濯機、物干し場、更衣室、シャワー室などもまだ未設置という状態でした。また避難者間で差が出始めたかなという感じでした。自立できる人から自立されていき、残っている人たちは高齢者の方々が多く、なかなか生活再建に向かっていけないという方が多かったです。そこをどう支援するかが課題になり始めていたと思います。

避難所支援活動 その2 能都(のと)中学校

竹内さん: 第4クールで1月21日～27日の間、能登町立能都中学校で避難所の運営管理の支援をしました。丘の上にある中学校で、避難者は85名ぐらいでした。2日目から雪が降り、雪が残っている毎日でした。

電気は使えましたが上水道と下水道は使えないため、屋内トイレは使えませんでした。避難者の方は屋外にあるトレーラートイレ、感染者の方は屋外にある仮設トイレ、身障者の方も屋外にあるテント型のトイレが使われていました。手洗い場も、上水道が使えないのでタンクを設置して、ペットボトルの水を補給しながら使用していました。体育館を避難所にしていましたが、比較的個室が多かったので、4ヶ所を感染者の隔離スペースとして使用していました。他からもこちらの避難所へ感染者の方が移ってこられ、感染者の方が比較的多い避難所でした。

避難所支援活動として、朝昼夕の食事の用意、物資の運搬、整理、管理、そしてトイレの掃除、感染者の対応、医療者との情報共有などを基本的な活動としていました。第1日目に、野口健さん

が CHAGE and ASKA の ASKA さんから提供いただいた寝袋を搬入してこられました。2 日目は段ボールベッドも設置されました。徐々に避難所の状態も良くなってきました。提供いただいた寝袋を配付し、adidas さんからも洋服の提供がありましたので、洋服のコーナーも設置しました。



3 日目は体調不良者の対応をしながら、感染者用トイレの掃除をしました。蓋を開けると、泥状の糞便が散乱していて困っていましたが、巡回で来られた日赤の医療チームの方に隔離患者さんの情報の整理やトイレ掃除の手伝いをしていただき、すごく助けられました。この日は炊き出しの方々が来てくださり、久しぶりに炊きたての白いお米や温かい豚汁をいただくことができました。4 日目は、車で 5 分ほどのところにあるスポーツ施設内の自衛隊のお風呂に入りに行きました。大変混んでいて、女性風呂は約 2 時間待ちで、待合室用テントが混雑していたので、ここで感染するというような状態でした。

スタッフは、県職員 3 名と能登町役場の職員さん 1 名の 4 名、ボランティアのスタッフさん 1 名の合計 5 名で運営していました。物資の保管庫から、食料だけを体育館の倉庫に運んで、卓球台を利用して食事の準備をしていました。ホワイトボードを利用して、スタッフみんなで情報を共有していました。トレーラートイレは水洗です。毎日給水車が来てくれますから、コンテナに給水していただいて、トイレ掃除のときにトレーラートイレに水を補給するという作業をしていました。日に 1、2 回、巡回される日赤の医療チームの方々と感染者の情報を共有しながら対応していました。

避難者の皆さんはとても仲良くされていて、設置されているテレビで大相撲を見ながら盛り上がっておられて、何とか明るい雰囲気を保ちながら、楽しく過ごされていたという印象です。5 日目は上水道が復旧するという情報が朝から入りました。ただ下水道はまだ使えないので、校長先生と、どこの屋内トイレを使うか、使用方法はどうするのかについて調整して、感染者の隔離部屋に近いところに感染者用のトイレを設置し、感染が拡大しないように工夫しました。またトイレットペーパーをトイレに流してしまうと下水道に負荷がかかるので、ゴミ箱を設置して、使ったトイレットペーパーはゴミ箱に捨てて、トイレに流さないようにして使用することにしました。

上水は検査が終わっていませんので、手洗いには使用できますが、飲み水は引き続きペットボトルの水を飲んでもらうようにしました。夕食の後に、高齢者の方が 40 度ぐらいの高熱を出されたので、その対応に深夜まで追われ、翌日、避難者の皆さんにお別れの挨拶をして、第 4 クールの活動を終了しました。

能登町役場での避難所運営活動支援業務

大平さん：現地には 1 月と 4 月の 2 回行かせていただきました。能登町役場内の各府県や省庁の連絡員等が集まるリエゾン室で主に業務にあたっていました。滋賀県が担当している避難所を視察したり、避難されている方や避難所を運営している県や市町の職員の困りごとなどを聞き取ったり、

避難所職員の体調管理や避難されている体調不良の方の様子を把握していました。

各避難所の様子	
避難所によって異なる点	
■ 地域によって年齢層が異なる →若い方が多い地域は1月の時点で自主的に運営されていた (食事、掃除、物資受取・整理)	
■ トイレの状況 →トレーラートイレ、仮設トイレの設置数(コロナ、ノロが発生した際の対応に苦慮) →既存の屋内トイレの使用可否	
■ 炊き出し →全くない避難所もあり	
■ 医師の常駐 →常駐していない避難所もあり、体調不良が発生した場合の対応に苦慮	

能登町の中でも地域によって避難所の年齢構成が異なっていました。若い方が比較的多い地域では1月の時点で、食事の配膳や掃除などを自主的に運営されている避難所もありましたが、一方でお年寄りが多い地域では、自主的な運営が進まないという状況でした。またトイレについては、トレーラートイレや仮設トイレの設置数が避難所に

よって異なり、数が足りないという避難所もありました。屋内トイレが1月の時点で使えていたところと、全く使えないところもありました。炊き出しも一定程度炊き出しがあるところと全くこないところもありました。医師や看護師の方が常駐されている避難所もあれば、全くないという避難所もあり、体調不良者が出たときに隣の避難所まで連れて行って診察していただいているという違いもありました。

1月と4月では、まず水が使えるということが大きな違いでした。1月の時点ではほぼ水が出なかったため、歯磨きをするにもベッドボトルの水を使っていましたが、4月ではほぼ水が使えるようになりました。またトイレも既存の屋内トイレが使えることが、非常に大きな違いでした。また、お店が開いている、空いていないということも大きな違いでした。1月は空いている店が全くないという状況でしたが、3ヶ月経つとコンビニやスーパーも時間限定ですが開いていました。時間が経つにつれ、滋賀県が担当する避難所も減り、避難されている方もかなり減ってきました。自主的に生活ができる方は自宅に帰られるので、4月でも避難されている方は、やはり高齢の方が多かった状況でした。

次第に道路も復旧し、水が使える状況になりましたので、自衛隊のお風呂の撤収が4月ぐらいから始まりました。撤収後は、近くにある民間の温泉施設などが無料で利用できるということでしたが、送迎バス等の交通手段がない中で、車のない方はどうして行ったらいいのかという問題が新たに生じてきました。また4月になっても倒壊した建物がなかなか解体されずにそのままになっていました。上水道は復旧してきましたが、まだ下水道が使えないところも一部あり、上水道に比べて下水道の復旧が遅いと感じました。

避難所では当初は土足で体育館に上がって、そのまま簡易ベッドなどで寝泊りされていましたが、ダンボールベッドの設置が進んできました。避難所によっては体育館が避難所になっているケースもあれば、各教室に避難所が設置されているところもありました。地域ごとに避難部屋を分けて避難されている避難所もありました。

仮設トイレは水が流れないので汚れや臭いが気になりました。トレーラートイレは水が流せるので、仮設トイレよりにおいが気になりません。しかし段差があるので、お年寄りの方にとっては階段を上がるのが大変で、雪が降ると滑って危ないという課題もありました。スロープのついたトイレは水も流れますし、車椅子の方やお年寄りでも利用できる非常に優れたトイレだと思いましたが、数が少なかったです。スロープ付きのトイレがたくさん配置されるとバリアフリーで非常に良いと

思いました。

一人ひとりに備えていただきたいこと

川田さん：滋賀県でもこういった大規模災害が起きれば、避難所生活になる可能性は十分にありますが、避難所に自分がいたとしたら、こういったことはできるかなどとイメージを少しは持っていただけでしょうか？

災害が起こる前にできることがあります。しがプラスワン 2024 年の春号はネットでもご覧いただけますが、災害の特集をしています。備蓄は一人ひとりですぐにできます。いろいろなものを備蓄すると災害時に便利です。災害発生当初は食べ物がすごい厳しい状況になります。缶詰やレトルト食品は災害時でも大活躍します。さらにすぐにはできることは家具の固定です。タンスなどが倒れてきたら非常に危険です。ホームセンターなどで売っている留め具などで家具を止めたり、テレビと台の間に揺れを吸収するジェルシートを挟み込むと全然違います。また家具の配置では、寝ている

場所には大きいものを置かないなど、少しの工夫で自分の身を守ることができます。備蓄については、東京都のホームページの『東京備蓄ナビ』がとても便利です。家族構成を入力すると、家族構成に合った備蓄食料だけでなく、このような物品が良いのではと教えてくれます。



また能登では古い家屋が集中的に被害に遭いました。昭和 56 年（1981 年）に日本の耐震基準が大きく変わりました。1981 年以前の木造住宅については、お住まいの市町村の支援で、どれぐらい揺れに強いのかという耐震診断を無料で受けることができます。耐震診断の結果、耐震性が低いということであれば、耐震改修する際の補助金制度もありますので、市町村の窓口にお問い合わせください。

平時から備えていただき、災害が発生したときに、避難所で自分のできることをやっていただくと、行政の力を住宅の再建やインフラ復旧に回せるので、地域の復旧復興の近道になります。災害が起きると人口が減ってしまったりしますが、一人ひとりが受身ではなく、お祭りなど地域が盛り上がる復興イベントに参加することも復旧復興の近道になると思います。

参加者からは多くの質問がありました。その一部を紹介します。

問：トレーラートイレを置いていたのは民間企業ですか。NPO 法人ですか。無償提供ではないと思いますが、費用は行政から支払われていたのですか。

答：自治体からの支援という形で設置されたところが多かったです。その他に民間企業が設置されたところも一部ありました。費用面は様々で、無償で支援されていたところもあったと聞いていますし、国が費用を負担するという制度もありました。

問：避難所への受け入れの基準はあるのでしょうか、早いもの勝ちですか。

答：基準はありませんし、早い者勝ちでもありません。能登町内の避難所であれば、町の方を受け入れるのは当然ですし、1月1日に地震が起こりましたので、帰省されていた方も多くいらっしゃったと聞いています。また能登町は観光地ですから、観光客の方もいらっしゃったと思います。町民以外の方も避難所に入ることができます。避難所は広く被災者の方を受け入れる場所です。

問：避難所に持って行って役立ったというものがあれば教えてください。

答：(高木さん) 寝るときに下に敷くエアマットです。おそらく床に寝ることになるだろう。しかも暖房が入ってるかどうかわからないので登山のときに使うエアマットと冬山用のシュラフ（寝袋）をセットで持っていきました。非常に役立った記憶があります。

(大平さん) イビキで寝れない、明かりが入って眠れないという状況がありましたので、アイマスクや耳栓が役に立ちました。避難用のリュックにも入れておかれるといいと思います、共同生活になりますし、そういった工夫がすごい大事だと思います。

(竹内さん) お風呂が入れないということでしたので、小さい鍋を持っていき、ポットのお湯やペットボトルの水を入れて、タオルで顔や体を拭いたりしました。お風呂に入れなくても気持ちよく過ごすことができました。

問：支援活動を終えて、当時の活動を振り返ってこうすべきであったというところ、またこういったところが良かったというところがあれば聞かせてください。

答：こうすればよかったという後悔ばかりです。食事面をもう少し充実させることはできなかったか、もう少し住環境を整備することができなかったかなどと思っています。そういう中で大切だと思うのは、やはり平常時の備えです。いどこで何が起こるかわからないので、準備をしておくということが重要だと改めて感じました。



高木さん、竹内さん、大平さん、川田さん、参加者のみなさん ありがとうございました。